商品の定在 Dasein と実在 Existenz*

江原 慶†

2010 年 4 月 23 日

1　定在と実在

■定在

使用価値としての商品の定在は、「人間の欲望の対象」とか、「もっとも広い意味での生活資料」と表現されている。(Kr., S.107.)

⟶ ひろく、人間の主体的な欲望によってイメージされ、塑造される商品の在り方。ここでは使用価値は、商品体の意味で使われていると読める。

■実在

商品の実在は、「自然的」であり、「手でつかむことのできる」とされる。(ibid.)

⟶ 使用価値の定在のように、欲望によって形成されるだけでなく、実際に手に入れうる時点での商品の在り方。外延の確定した商品の在り方。

■定在と実在の一致

定在と実在は「合致する fallen zusammen」とされる。(ibid.)

fallen zusammen：結果として、同一の状態に陥る

⟶ 外延をもった商品（商品の実在）は、人間の欲望する商品と一致していなければならない。そうでなければ望んだものを手に入れることにならない。

だから結果として、自然的な商品の違いというものは、人間がその商品に対して抱く欲望の違いと一致する。

ただ、定在と実在との間の論理的先行性は問題にされていない。つまり、商品の区別が、人間の欲望によって行われているか、自然的なものによるのかは定かでない。

2　使用価値と「利用のしかた」

■使用価値の「現実化」

使用価値は、「消費の過程においてのみ現実化される verwirklicht sich」「同じ使用価値がいろいろに利用されうる vernutzt werden」(ibid.)

⟶ 使用価値そのものと、その現実化ないし利用のされ方は区別される。一つの使用価値につき、様々な利用法がある。

■「利用のしかた」の「総括」

---

* 2010 年度経済理論演習（小幡道昭）

† 東京大学大学院経済学研究科修士　kei.ehara@gmail.com

使用価値を「現実化」する「利用のしかた Nutzanwendungen」は色々ありうるが、それらは「一定の諸属性をそなえた物としてのその使用価値の定在のうちに総括されている zusammengefasst」(Kr., S.107,108)

⟶ 実際の利用のされ方が様々であるということは、つまり、特定の主体の欲望の満たされ方は多様であるということ。それでも使用価値としての商品の定在は、そういった様々な利用のしかたを「一定の諸属性」として有し、やはり使用価値そのものは同一性を保つ。

小麦は、パンにされようと麺にされようと、小麦として人間一般の欲望を満たす。

したがって、ここからは、欲望に対する二重の視角が見いだせる。

1. 特定の主体の、個別性を有するものとしての欲望(=様々な「利用のしかた」)
2. 不特定多数の主体の、社会性を有するものとしての欲望(=使用価値の定在の基礎)

商品が使用価値たりうるのは、後者の欲望を満たすものとしてである。逆に言えば、社会的に求められるものであれば、有体物に限らず商品として取り込まれうる。商品が特定の主体によってどのように利用されるかは、商品にとって無縁である。

3 『資本論』との対比

商品の定在と実在についての論議は、物のレベルに繰り上げられている(先週の討論)。

> このような物はそれぞれ、多くの諸属性の一つの総体であって、したがって、いろいろな方面で役に立つことができる(K., I, S.49.)

ここは、一つの物であるが故に様々な有用性があっても同一性を持つとされているように読める。

そして、続いての段落で「一つの物の有用性は、この物を使用価値にする」(K., I, S.50.)とされている。ここの有用性と上の「多くの諸属性」は同じと考えると、前節で見た個別的欲望によって商品が使用価値たりうるとされていると言うことになる。すなわち、社会的欲望の対象としては物が相当するとされ、使用価値としての商品には個別的欲望が対応させられている。

『批判』　社会的欲望 → 使用価値
『資本論』　物 → 様々な有用性(個別的欲望) → 使用価値

参考文献

- Marx, Karl [1859] *Zur Kritik der politischen Ökonomie*, in *Marx-Engels Gesamtausgabe* II.2, Dietz Verlag, 1980
- Marx, Karl [1867] *Das Kapital : Kritik der politischen Ökonomie*, Buch I, in *Marx-Engels Werke*, Band 23, Dietz Verlag, 1962